

先週は、最も重要な掟について、イエス様が律法学者と問答したところでしたが、今日の箇所は、そのイエス様が十字架にかかる直前の、議論の火曜日という日に、エルサレムの神殿で起こった出来事です。

過ぎ越しの祭りが近く、大勢の人がイスラエルだけでなく、世界中からやってきて、献金をささげているのでしょ。賽銭箱にみんながお金を入れているのを見ていたイエス様を想像したら、ちょっと滑稽な気持ちになります。

今、礼拝で、献金袋を持った人がずっと会衆席を回って、だれがどれくらい入れていたか、歌を歌いながら、ジロジロみていたら、ちょっといやらしいですね。しかも、イエス様は人々の様子を見て、大勢の金持ちがたくさん入れているのと、ひとりの貧しいやもめがレプトン銅貨二枚、1クアドランス入れるのを見て、それを弟子たちに解説するのですから、はしたないことをしているなあ、と思うかもしれません。このような場面を想像すると、イエス様も思い切ったことをするなあ、と思ったりします。

レプトン銅貨2枚が、どれくらいのお金になると思いますか。聖書の後ろの方にある「度量衡および通貨」という表で換算すると、レプトン銅貨2枚は1デナリオンの64分の1という額です。1デナリオンが労働者1日の賃金ということにしたら、どうでしょう。ピアノの調律など頼んだら今は1万2千円くらいかかるので、その60分の1としたら、200円でしょうか。

福音書のイエス様の解説を読むと、「皆は有り余る中から入れたが、この人は、乏しい中から自分の持っている物をすべて、生活費を全部入れたからである。」お金の額とか、収入に対する割合などを問題にしているのではありません。献金に対する姿勢が、神殿に来ている皆とこのやもめは違っていることを説明されているように思います。

金持ちをはじめ皆は、いくら高額の献金をして、自分の生活がそれによって危うくなることはないようなささげ方です。彼らは余り物をささげているのであって、そこに心は全くないのです。しかし、この貧しいやもめは、生活のすべてを神様にささげたのです。あとは他の人の施しに頼るしかありません。そんな決断を迫られているのが、信仰ではないか、と今日の福音書は語っているように思います。

1ヶ月前でしたが、金持ちの男が、「永遠の命を受け継ぐには、何をすればいいでしょうか。」と質問した話がありました。イエス様は、「持っている物をすべて売り払って、貧しい人に施し、自分に従え。」と言われました。金持ちはそれができなかったのですが、このやもめは、それができたのです。

ちょっと、常識を超えた話のように思えてしまいますが、今日の旧約聖書には、やはりやもめが登場してきます。この人は、最後の小麦粉と油でパンを焼いて食べることにしていましたが、それを預言者エリヤが要求するという、話です。この話は、今日の福音書のやもめの献金の話を補うような物語にも思えます。

面白い話なので、すこしゆっくり考えてみましょう。

イエス様の時代からさかのぼること、約900年くらい前、エリヤという預言者がいました。彼は、旧約聖書では、モーセと並んで有名な指導者で、死ぬことなく、火の戦車で天に昇っていった人です。そして、救い主メシアが現れる前に、もう一度、エリヤがやってくる、ということが、旧約聖書の最後、マラキ書の最後に書かれていて、ユダヤ人たちは、過ぎ越しの祭りの食事の時には、やがて再来するエリヤの椅子も用意しておく習慣があるんです。ユダヤ教においては、とてもユニークな人物です。

神様から呼び出されたエリヤは、イスラエルに干ばつが来ることを預言します。そして、彼は先ず、ヨルダン川に東の方から流れてくるケリト川のほとりに住んで、カラスに養ってもらって生活をしていました。カラスが朝と夕方、肉とパンを運んでくれて、水は川から飲む、という生活でした。

何となく、荒野でモーセたちが、朝はマナ、夕方はうずらをもらって生きていたことを想像します。そして岩から水が出てきました。自分の力で生きるのではなく、神様によって養われていたのです。

しかし、そのケリト川の水も涸れてしまったので、神様はエリヤに、「立ってシドンのサレプタに行き、そこに住め。わたしは一人のやもめに命じて、そこであなたを養わせる。」と言われました。それが、今日の旧約の初めの部分です。

言われるとおりにサレプタの町まで来ると、エリヤは薪を拾っている女性を見つけて「器に少々水を持って来て、わたしに飲ませてください。」と言ったのです。

この「水を飲ませてください」というのは、聖書では他にもよく出てくる言葉です。イエス様も、ヨハネによる福音書の4章で、サマリアの女の人に、井戸のところで「水を飲ませてください」と言いました。旧約聖書では、創世記24章で、アブラハムのしもべエリエゼルが、イサクのお嫁さんを探すのに、水がめを持って現れたリベカに「水がめの水を少し飲ませてください」と、言いました。求める人を見つけ出す基準にして、相手の反応で、それに相応しい人かどうかを判断する、テストに使ったのです。

それでユダヤ教のラビたちは、『アブラハムの僕エリエゼルの行ったテストのことをよく知っているエリヤが、自分のことを養ってくれるやもめを見つける方法として、「水を飲ませてください。」と言った』と説明するのです。

まず、ここまで、エリヤ自身が、自分の力でなく、神様を頼り、カラスに養われた話になっています。これは大切なことですが、今日肝心なのは、エリヤに声をかけられたやもめの側の問題です。

このやもめは、アハブ王の妃、イゼベルの出身地、シドンに住む外国人です。しかし、この人の口から出た最初の言葉は、「あなたの神、主は生きておられます。」でした。彼女はエリヤにこう言って、先ず彼女が、イスラエルの神様を信じている信仰告白をします。

このやもめは、やはり干ばつのために食料が尽きて、もう家には、壺に一握りの小麦粉と、瓶の中に少し油があるだけでした。

そんな貧しいやもめに、エリヤは、水だけを頼んだのではありません。「パンも一切れ、手に持って来てください。」と頼んだのです。ところが、彼女は、「わずかな小麦粉と油を今拾った二本の薪で焼いて食べたら死ぬのを待つだけです。」と窮状を訴えます。

それでも、エリヤは「恐れてはならない。帰って、あなたの言ったとおりにしなさい。だが、まずそれでわたしのために小さいパン菓子を作って、わたしに持って来なさい。その後あなたとあなたの息子のために作りなさい。」と、無茶な命令をします。しかし、エリヤはそれに付け加えて「なぜならイスラエルの神、主はこう言われる。主が地の面に雨を降らせる日まで、壺の粉は尽きることなく、瓶の油はなくなる。」と約束しました。

そして、このやもめが、エリヤの言うとおりにすると、小麦粉と油に事欠かなかった、というのです。

やもめは、「最後の食事だから、あなたには差し上げられません。」と断れたでしょうし、あるいは、「食べた残りを差し上げます。」と言うこともできたでしょう。エリヤの要求を後回しにもできたのです。

しかし、このやもめは先ず先に、最後の材料で神様の用のためにパンを焼いた。この信仰が必要なのでしょう。

神殿にささげものをしに来たやもめは、自分の生活費を神様にささげたのです。何を差し置いても神様のことを第一にしたのです。その問題だと思ふのです。

今日の旧約と福音書のやもめの話は、献金などの、わたしたちのささげものについて大切なことに気づかせてくれます。私たちは、先ず神様を第一にする、ということに心がけましょう、ということです。自分の生活の余ったもの、余裕のある時のものをささげるのではないのです。自分のすべての持ち物の中から、最初に神様のためにささげることにする、という姿勢を教えているのです。

私たちは、1日の始まりを、先ず何から始めているのでしょうか。1日のはじめに聖書を読む、とか聖歌を歌う、とか。何か神様とのかかわりを持つようにしているのでしょうか。車の運転をする前に、神様に今日も安全運転ができますように、と祈っているのでしょうか。自分の収入から、先ず献金を用意するように心がけているのでしょうか。

そのような姿勢で生活する時、神様はわたしたちを支えて、尽きることなく祝福を与えてくださるのだ、ということを聖書は語っています。

私たちの生活の中心に神様を置くように努めたいと思います。